

雁金（色増艳夕映）

雁金を

結びしかやもきのふ今日

残る暑さを忘れてし肌につめたき風たちて

ひるも音をなく蟋蟀に

哀れを添える秋の末

我身一つにあらねども

憂にわけなきことにさへ

露の涙のこぼれ萩

くもりがちなる空ぐせに

夕日の影の薄紅葉

梅も桜も色かへる

中に

常磐の松のいろ

まだその時は卵の花の

夏のはじめに白河の

関はなけれど人目をば

厭ふへだての旅の宿

飛び交う蝶に灯の

消えて若葉の

木下闇

おもはぬ首尾にしつぽりと

結びし夢も

短夜に

覚めて恨みの明の鐘

空ほのぐらき東雲に

木の間がくれのほととぎす

鬢のほつれをかきあぐる

櫛の雫かしづくか露か

濡れて嬉しき

朝の雨

はや夏秋もいつしかに

過ぎて時雨の冬近く

散るや木の葉のばらと

風にみだるゝ萩すゝき

草の主は誰ぞとも

名を白菊の咲出でゝ

匂ふ此家ぞ知られける。